

もし野球部の女子マネージャーが

ドラッカーの『マネジメント』を読んだら



タイトル	もし野球部の女子マネージャーが ドラッカーの『マネジメント』を読んだら
著者	岩崎夏海
出版社	ダイヤモンド社
発売日	2009年12月3日
ページ数	272p

話題になって久しい「もしドラ」と呼ばれている本書を遅ればせながら読んでみました。図書館で借りようとリクエストしたのですが、余りに希望者が多く本書を手にしたのはリクエストしたことさえ忘れてしまっていた2か月後でした。図書館で手にした本書の表紙のデザインにびっくり、普通であれば、私などは決して手にすることのない「萌え系」でした。本を借りる時に少し恥ずかしい思いをしたのは初めてです。

本書については、賛否両論があり、読む前から否定的な感想も多く、「文章も稚拙で、内容は単純過ぎて現実的でない」など散々な批評が多かったので、「どんな本だろう」と興味津々でした。

主人公が通っていた高校は公立の普通高校の進学校で、偏差値は60を超え、大学進学はほぼ100%、毎年数名の東大合格者を出すほどだが、スポーツの方はさっぱりの高校という設定です。高校の先生であれば、一度こんな高校で教えてみたいと思うような高校でもあります。

その野球部の女子マネージャー(すなわち、主人公)が、ふとした勘違いから、経営学を高校野球に適用し、自身はもちろんのこと、野球部部員、監督、周りの部活動の部員達も巻き込んで、それぞれがマネジメントを行っていくうちに人間的に大きく成長していく、という青春物語です。主人公を中心に、ドラッカーの「マネジメント」を引用し解釈しながら物語が展開します。

主人公は、「マネージャーとは何か」にまず疑問を持ち、近所の書店に行き「マネジメント」に関する本を女店員に尋ねるとドラッカーの本を勧められます。主人公は中身も見ずにその本を買い求めます。

ところが、家に帰って早速読み始めますが、すぐ後悔します。すなわち、本の中に野球についての話がちっとも出てこなかったからです。

しかし、無理して読んでいるうちに、その本が意外に面白いことに気づきます。すなわち、単に「企業経営」についてだけ書いているわけではなく、そこには、企業を含めた「組織」の経営全般について書かれていること、つまり野球部にも当て嵌まりそうだとすることに気づきます。

さらに読み進めていくと、「マネージャーの資質」のところで、「自分はどうなんだろう」とドキッとするところがあります。この段階で、すでに「マネジメント」に嵌まり込んでいることが判ります。中でも印象的だったのは、ドラッカーの「顧客とは誰かを問え」という教えに従って、野球部の顧客は誰なのかを徹底的に考えるところです。組織にとって最初にやるべきことは、顧客を定義することだからです。

このように、ストーリーの展開は「こういう問題には、どうマネジしていくか？」という問答形式で話が進んでいきます。なお、「manage」には、「経営する」や「管理する」を意味する他に、「何とか・・・する」という意味も含まれています。

問題のテーマが出てくるごとに、主人公が「マネジメント」を読んで具体的にどう対応していくかを述べたいところですが、それを書いてしまうとネタがばれてしまうので、これから本書を読まれる方のために、内容そのものは伏せておきましょう。

ドラッカーの「マネジメント」は、引用された文面を読む限り、多少内容が理解し難く、文章も固い印象を受けますが、「哲学者ではない人間が書いたものだから判らないはずはない」と思って無理して読んでいくうちに何となく判ってくるものです。

本書はそれらの文章を主人公たちが真剣に読み込んで、高校野球という身近な題材に取り入れて、実践していくわけです。主人公が、それを自己流に野球に置き換えて解釈する。その視点がとても分かりやすくうまく出来ています。

これを自分の会社、または部活等に置き換えて考えてみるとどうだろうかと、考えると次の段階への想像を容易にしてくれます。

「人を生かす組織」の在り方で悩んでいる人は多いと思います。「学校」、「NPO」、各種の「教会」などヒントになるところが沢山あります。特に、若い高校生や大学生諸君は、今までは「先生がどういう正解を答えさせようとしているか」を見抜く生徒が、優等生でしたが、社会に出ると正解は勿論ありません。つまり、これまで劣等生だった人にも、逆転のチャンスが巡ってくるわけです。

人の手を借りずに、どうしても自分一人で考えて「答え」を出さなければならなくなった時には、ドラッカーの「マネジメント」はものごとを順序立てて考える上で大いに役に立つはずです。

本書では、生き生きとした高校野球部の1年間を通して、ドラッカーの「マネジメント」に触れることができます。その手法を学べば良いのです。

「問題発生→どうマネジするか→次の問題発生→どうマネジするか→さらなる問題

発生→どうマネジするか……」というように、ドラッカーを読んだことがない人にも、高校野球を通して、その利用方法を易しく、解説しています。しかも、主人公が参考にしたマネジメント【エッセンシャル版】の頁数まで記載されているというサービスぶりです。

あとがきで、筆者はドラッカーのマネジメントを読んで、心を揺さぶられ、涙があふれて止まらなかったとあります。ドラッカーの著書が多くの読者に感動を与える理由の一つは、その根底に聖書的世界観があるからでしょう。ドラッカー自身が熱心なクリスチャンであり、教会の成長や教会のマネジメントに大いに関心を払い、それに関わっていたことは良く知られています。

著者の岩崎氏(放送作家)のもとには、様々な組織から講演の依頼が殺到しているそうです。一般の「企業」はもちろんのこと、「経営者」、「看護師」、「消防庁」、「教育委員会」など問題を抱えている団体は多岐にわたっています。これらの依頼者が口にするのは「自分たちで変わっていくしかない。だからこそ、今マネジメントが必要なのだ」という問題意識だそうです。

さて、大震災や原発事故の災害を処理する能力は、政治家の器量のバロメータでもあります。「内政基盤の弱い政権」や「外交力が乏しい首相」の時に災害が起きると、それは「国家の危機」に直結します。「阪神大震災(村山政権下)の時も今回の「東日本大震災」(菅政権下)の時も左翼政権の下での被災でした。残念ながら「阪神大震災」の時は、村山首相は「何せ初めてなもんで」と対応が遅れ、「東日本大震災」では菅首相の思いつきばかりの対応を見ていると、「すべきこと」と、「やってはならないこと」との区別が殆ど判っていないようです。首相にも頭の中を整理するために本書の主人公並みにまず現実を直視して、「リーダーシップ」の勉強から始めて欲しいところです(もう遅いですね)。

本書を読み進めるうちに「マネジメント」というものが全く分かっていない人が政権のトップの座につくと、本書の主人公が通う学校のかつての野球部のように大変なことになるという事を痛感しました。

国土の1/4が被災し、困難が山積しており、重要な課題はどれ一つとして解決できそうにありません。どうしていいのかわからぬままおろおろしている菅首相の「生気がなく」、「目が泳ぎ」、「自信のなさそうな」顔を見ていると、しっかりした指導者が皆無の状態がいつまで続くのか、このまま国内問題に終始していれば、日本は国際環境のなかで取り残されるのではないかと、被災後は時間が止まったままですがこれで良いのでしょうか。まさにマネジメントの登場となるわけですが、今の民主党政権にそれを要求するのは無理なのではないでしょうか？政治家は「想定外の大震災」と事態の大きさに動転している場合ではないのですがね……。

話題性とドラッカーへの取っ掛かりとしては、大変易しく、面白い読み物です。前評判の「文章が稚拙で、内容も単純過ぎて現実的でない」という批判はほとんど気になりませんでした。

本書を読むと、「知識が豊富なのが大切なのではなくて、今取り組んでいる問題にそれらを如何に有効に結びつけて全体像を描き、より良い解決に導いていくことが出来るかが大切である」ということがよく判ります。読みやすい本です。老若男女を問わず全ての人にお勧めです。

2011. 5. 8
